



静かなるスーパーマン 葛谷栄一さん



現在は、場面に応じて楽器を使い分けて楽しんでいく状況にあります。ここ数年、リコーダーアンサンブルと和楽器演奏の二つのグループを主宰し、これらを中心に年に何回かミニコンサートを開いています。

♪ミニコンサートはどんな時に開かれるのですか？

大きなものは、何かのお祝いとして開いていただきました。ありがたいことに還暦祝、退社祝とも二胡の仲間が設営。またいろいろの楽器の仲間が賛助出演して盛り上げてくれました。今年三月の出版記念会の主催は「銀座ミツバチプロジェクト」の仲間たちでした。

十月九日の中秋の名月の日には、神田神保町にある農業書専門の本屋でお月見コンサートをすることになりそうです。

♪農業について何冊の本を出しているらしいやいますが、具体的にどのようなお仕事ですか？

農林中金総合研究所での基本的仕事はマネジメントです。ただし、研究員が仕事を抱えて対応できない問題については、調査研究も補完的にやってきました。ところが補完的に取り組んできた有機農業をはじめとする環境保全型農業、飼料用米・イネ、米粉原料米、放牧、バイオマス、都市農業、コミュニティ農業等の課題が時代の変化とともにメインテーマとなって、自ら最前線

農林中金総合研究所の常務取締役、特別理事というハードなお仕事を果たされながら、篠笛、尺八、リコーダー、フルート、ギター、二胡などの演奏を楽しみ、週末には山梨で自ら自然農法を実践し、子供たちにそれを伝えるべく小学校の先生だった奥様の政子さんとはみんなの家のどか農土香を続けていらつしやる葛谷さん。数えきれない肩書をもつ超人的な忙しさの中で、お会いするときはいつも飄々と涼しげなたたずまいが心に残ります。

♪初めてお会いしたのは二十数年前で、しょうか。発表会での見事な「遠の音」が印象に残っています。

「遠の音」を吹いたのは、多分一九九〇年、私にとって三回目で最後の発表会でした。

篠笛との出会いは八七年十月三日の鎌倉・覚園寺での鯉沼先生の演奏会でした。鶴岡八幡宮にお参りに出かけた際に入った蕎麦屋に演奏会のポスターが貼ってありました。使っていたリコーダーのテキストが鯉沼先生の著作で、リコーダーの鯉沼さんが和笛を吹くなんて、ということに興味津々。当日、最初の「遠の音」の音を聞いたとたん、これが自分の求めていた音だと直感し、財布に切符代だけ残して、テープや楽譜を買いただけ買い込みました。そして電話帳で浅草・花川戸の小倉楽器

♪心おもむくがままにさまざまな楽器を演奏されますが、楽器遍歴についてお話を。

学生時代になぜかフルートに魅かれ、社会人になってはじめてのボーナスでフルートを購入したのがそもそものです。

仕事がいそがしくて習う時間がなく、教則本を買ってきただけの独学。五年ほどでその限界を感じて、バイオリンに。以降、四、五年ごとに限界がきては楽器を変更する繰り返し。ギター、リコーダー、そして三十八歳の時に篠笛に出会いました。その後も尺八、二胡、ウクレレ等を。

家内からは「浮気者」となじられ、楽器の置き場所にも苦労してきましたが、仕事モードから自分を解放し、バランスを回復するためには音楽、特に楽器に触ることが必要だったということでしょうか。

♪日本の各地を巡り、世界の様々な国を訪れて心に残ったことを。

たくさんあってお話ししきれません。

もう一〇年以上前のことですが、ドイツの農家に泊まった夜、家内と一緒に篠笛を吹いたところ、その家の小学校高学年の女の子がフルートを演奏してくれました。次にお姉ちゃんに負けず私も、といって小学校前の女の子が歌ってくれました。そうしたらおじいちゃんがオレもといつてロシア民謡を歌ってくれました。おじいちゃんには第二次大戦でソ連と交戦し、捕虜となつてしばらくシベリアに抑留されていたそうです。

五年ほど前にはイタリアのピエモンテ州のヴァレーゼリグレで日伊文化交流の催しがあり、講演に招待いただきました。その際、家内が和服を日本で何枚か調達して元城塞である会場で展示をしていました。そこで私が篠笛を吹いていたところ、中年の女性が喜んでくれ、家に招いてくれました。家に行ってみたら自分で本を見ながら和服を縫っていました。またご主人といっしょに園芸・家畜・養蜂など自給自足をし

ながら田舎暮らしを楽しんでおられ、すっかり意気投合して、この夏もイタリアまで足を伸ばして、彼らと再会してきました。

またこの七月二十三日にはスウェーデンの古都ウプサラで、家内と篠笛の二重奏を中心としたコンサートをしてきました。元宮廷の庭を、植物学者リンネを記念して植物園としたもので、ウプサラ大学が管理しています。ここの博物館のようなところを会場に演奏しましたが、音の響きが素晴らしい、会場から見える植物園の風景、熱心な現地の聴衆もあいまって、生涯最高の演奏ができました。

行った先々で篠笛や尺八を吹いてきましたが、私の名前は忘れていても、「あの笛を吹いた」というとすぐ思い出してくれま



山梨での活動について

もともと百姓が夢。鯉沼先生を訪ねて牧丘町に足を運び、田舎が残っているとともに、笛吹川、琴川、鼓川、扇山の地名が気に入って、竹藪を購入して畑に開墾したのが手始めです。九年前にみんなの家・

農士香をスタート。一泊二日の合宿で、子供の田舎体験教室を二か月に一回。大人の農士香を年二、三回。ワイナリーでの石窯ピザ焼きを毎月。またこの一年ほど、西東京市田無でおむすびハウスという学童保育と大人の居場所づくりも始めました。

畑仕事は私の専任、ボランティアは家内が主役で、私は会長兼運転手のパトロンです。二人で分担しながら楽しんでいきます。

♪退職後間もなく「農的デザイン研究所」を立ち上げられたその思いは？

日本は有数の経済大国になりましたが、一方で分業化が進み、社会・自然等のあらゆる関係性が分断されて、食料も半分以上を海外に依存するようになってしまいました。グローバル化を推進して、さらにお金への依存、目先の物的な豊かさを追求するばかり。しかし幸せの実感乏しく、生活は苦しく生きにくくなっているのが実情です。

時代は先進国から成熟国家へと転換を求めています。生命と暮らしを大切にしたい。地域にしっかりと根を下ろしてコミュニティを再生し、地域の自給・自立度を高めていかなければなりません。このために欠かせないのが市民の消費を通じての農業支援、農村との交流で、そこに文化・芸能が大事な役割を担っています。

シンクタンクという第三者的立場ではなく、できるだけ当事者として現場に寄り添って活動し情報発信していくことが農的デザイン研究所のねらいです。音楽と一体化した活動展開ができれば最高ですね。

(八月六日 神田にて)

曲を逆に吹く人

月夜に笛を吹きながら猪鼻に登って行く人がいます。八幡宮の楽人・元正が山井の私宅でその音を耳に留めました。聞いたことのない曲だったので、不思議に思っていました。とを追い、藪に隠れて目をこらしておりますと、青衣を被り剣を帯びた僧でした。

元正が名を問うと衣被りを脱いで「私です」と答えます。見ると山路権所司・永真でした。元正が重ねて曲の名を尋ねると「万歳楽を逆に吹いていたのです。逆に吹けとおっしゃる方もいるのです」と答えました。

永真は宮寺の寺主で皇太后宮大進藤原清家男かとも言われています。

「古事談」より

縁から落ちた名人

堀河院の御代のこと、勘解由次官明宗という笛の名手がおりました。帝が笛を聞きたいとお招きになりましたが、大変臆病な人で、帝の御前とだけ震えて吹くことができません。残念に思われた帝はお馴染みの女房（高位の女官）に「中庭に呼び寄せて吹かせよ。私はそこで立ち聞きしよう」と仰せられました。

月の夜に女房は明宗と語り合い、一夜の契りを結んで笛を吹かせることに成功しました。

明宗は女房に聞かせると思うと、こころゆくまに吹くことができました。その夜の笛の音は世に比べるものなほど素晴

古典の中の ちょっと変わった笛吹きたち

蛙に笛を仕込んだ笛師

日光山の楽人に柳田將監という笛師がおりました。茶を好み、自宅に茶室を構えておりました。そのくぐりの縁に竹の刀架をしつらえていました。いつからかその竹の中に雨蛙が住みつくようになりました。

時々鳴いていましたが、或る日將監が笛を吹きますと、その律に合わせて鳴いているように聞こえるので、將監はふと思いついて毎日そのあたりで笛を吹くことになりました。

日が経つにつれて蛙の歌は上達し、ついに笛の律にぴったり合うようになりました。蛙もうれしく鳴くようになりました。

將監はその蛙を深く愛して、その住まいを驚かさないうちに家族たちにも戒め、長く養っていたということです。

「甲子夜話」より